



たいら すお ● 2011年臨床研修修了後、産業医科大学産業医実務研修センターで活動。2013年三菱化学株式会社に専属産業医として入社。2017年三菱ケミカル株式会社へ統合、現在に至る。

産業医の醍醐味は「生き様に寄り添える」こと 変化を楽しみ、より良い生き方の実現に貢献したい

東京都千代田区丸の内に本社のある三菱ケミカル株式会社は、自動車・航空機、情報電子・ディスプレイ、包装、医療・健康、環境・エネルギーなどの幅広い産業分野に欠かせない素材や材料などを、総合的なソリューションとして提供する日本屈指の総合化学メーカーである。

同社では2016年から独自の経営戦略に基づく「KAITEKI健康経営」を推進、社員の健康増進と働き方改革に取り組んできた。これは、「人」を社会と企業の持続的成長を担う原動力であるとともに、最も重要な経営資源の一つと位置づけ、「人」の能力を十分に生かし、活躍を最大化するための取り組みである。

そこで今回は、同社の専属産業医として健康支援に携わっている平良素生さんに、同社の健康支援活動における産業医の役割、世界的な化学メーカーにおける安全衛生管理やこれからの産業医のあり方などについてお話を伺った。

産業医の実務に加え、全社的な仕組みの 検討・メンバーのサポートに関わる

現在、私は本社の健康支援セクションに所属しており、大きく二つの業務に携わっています。

一つ目は、本来の産業医としての実務で、産業医選任が必要な事業場を複数担当しています。法令業務に加え会社として進める独自の健康支援策についても拠点メンバーと共に企画・運営しています。二つ目は、全社の健康支援部門に関わる検討業務です。内容は大きく二つに分かれ、一つ目は方針・戦略に関わる企画検討業務・基盤づくり、二つ目は産業保健活動を地域の先生方と協力して進める体制構築と当社の「One team」の仲間になってくれた産業医の先生方のサポートです。

後者は自身の産業医経験も活かしオンボーディングプログラム(OBP)のもとサポートをしています。

OBPの際に気をつけているのは、チームメンバーとして頻繁に目線合わせを行い、安心できる関係性のもとで各先生が主体的に取り組んでいただくことです。多彩なバックグラウンドをお持ちの先生方のなかには産業医経験が浅い先生もいらっしゃいます。そこで、実務をイメージしながら学び合うロールプレイの企画や、「何でも相談室」というチャットルームを開設し遠隔でも相談・連携がタイムリーにできる場づくりを行っています。実際の相談内容は「健診で有所見だがアクションをとらない従業員にどう関わるか」「両立支援を進めるなかで患者と主治医、職場とどうコミュニケーションをとればいいのか」など様々です。一緒に問題点を整理し、参考資料や私

の失敗談も伝えながらどう考えるかを対話し、できるだけ自分で回答にたどり着くプロセスを意識しています。

社内外における変化への適応のため、産業医が果たす役割も変わってくる

最近のトピックスに「自律的な化学物質管理」があります。本社の役割の一つに、法令改正を踏まえ今後どのような管理を社内で行っていくべきか関係部門と連携して検討を進めることがあります。情報管理のあり方・関わるメンバーへの教育・運用周知など、リーディングカンパニーであるという自覚のもと多方面から慎重に検討しているところです。歴史の長い当社ですが、果たしてグローバルな世界のなかでどういった対応が必要なのかという点もきちんと協議した上でのセルフジャッジが必要になると思います。その意味で今回の改正は各企業がレスポンシブル・ケア活動や、安全衛生活動についてより主体的に捉え考えるきっかけになったと感じています。

従業員が生き活きと働くことで企業の「人」という資源が最大限に活用され、経営戦略のもと企業が価値を高めていくということに対して、私は健康支援セクションという立場から関わります。近年は働き方改革により、多様性と自主性、自律性といった点で企業も個人も意識改革が進みました。働き方の変化としては人事制度改革・ジョブ型へのシフト・DXによる自動化など、働き方改革が与えた影響は大きいです。この変化は決して容易なものではないですが、従業員一人ひとりがどう働いていきたいかをデザインする余地ができたことは非常にいいことでもあり、こうした変化への適応のために産業医が果たす役割も大きくなってきた・変わってきたと感じています。

健康になることがゴールではない 自己実現・価値を高めるには “その先”が重要

私自身は三菱ケミカルの産業医として、「会社が社会に貢献することを、健康という視点からサポートする」

ことを大切にしています。社内外の方との関わりを通じて、この自分の軸のようなものに気づくことができました。最近の自身の変化を二点挙げるとすれば、一点目は事業所から本社に異動し多くの人と関わる機会を持てたことで「これまで気づけなかった視点」に立てていることです。文化が違うメンバーと新しい物をつくっていくのは非常にチャレンジングなことだとわかりました。今まで当たり前に行ってきたこと、例えば従業員への健康プログラムなどこれまでは疑問すら持たなかった根本的なあり方から様々な意見が飛び交い、一つの会社のなかでもこんなにも多様性があるのだと肌で感じられたことが貴重な学びになっています。

二つ目は、従業員の生の声に加え、共に働くチームメンバーやOBPで関わる先生方などから様々なフィードバックを頂けていることです。ある社員からは「ここから10年、自分なりにいいパフォーマンスを出したいがどんな習慣をもつと良いだろう」と相談を受けました。またチームメンバーからは「社員の健康に関する意識が少し変わってきた気がする」「これからはきっかけづくりができれば嬉しい」とコメントをもらいました。健康になることがゴールではなく自己実現するにはどうすればいいか、従業員の変化を促すことへの気づきを共有してくれたことがとても嬉しかったです。時には自身で認識できていなかった課題に対するコメント・フィードバックを頂く痛みもありますが、そこが自身の成長には欠かせないと感じています。

産業医の醍醐味は「生き様に寄り添える」ことだと思います。人の生活、営みはまさに変化の連続です。ワクワクとやりがいを感じ邁進する姿もあれば、失敗し落ち込む姿、そしてそこからまた立ち上がりチャレンジする姿があります。そのリアルな日常に寄り添いながら応援できるのは、産業医の特権かもしれないとも思っています。せっかくいただいたこの役割を通して、より良い生き方の実現・企業の価値向上がその先の世界へと繋がっていくことに少しでも貢献できるよう頑張りたいと思います。